

原料にあてることはもちろん、稲ワラなどを購入し、牛を飼養して良質堆肥の生産につとめ、さらに種ジャガイモ栽培畑以外のほとんどに緑肥を作付してすき込むなどしました。私どもにとっていつまでも忘れられない思い出の一つとして、生産された堆肥を畑に運搬する仕事がありました。各畑はすべて堆肥場より高いところにあり、しかも運搬時期には道路がぬかるみとなってトラックの運行ができないため、冬季夜間道路が凍結したときを見計らって運んだもので、現在では思いもよらないことを当時のごく当り前のように思い成しとげたのです。このように営農条件が悪く、厳しい作業を行わざるを得なかったことも、病み上りの山崎さんにとっては大へん苛酷な環境であつたろう、と当時を思い出しても胸が痛みます。

ご本人はそのようなことは全く意に介さず、地下足袋^{たび}をはいて急な坂を上り下りし、広い畑をあちこちと歩きまわり、夕方事務所にもどってきてはその日出会った事柄を面白く皆に披露するのです。山崎さんの話を聞いていると疲れも時間の経過も忘れて明日への意欲がもり上るとともに、仕事の上での得難い

助言を識らず識らずのうちに与えられたものでした。

私は農林水産省勤務三十数年のすべてを僻遠の地ですごし、とくに日本の高度成長後は都市部と農山村部の生活環境の格差がいちじるしく、ときには何でこのようなところでいつまでも働かなければならないのかと、内心おだやかならざることもなきにしもあらずでしたが、いま振り返ると美しい自然と温かい人情にかこまれたなかで人間らしく過せたことを、ほんとうにしあわせであったと感謝しています。山崎さんにとっても3年の短い間ではありましたが、そこで心身ともに得たものはおそらく都会での10年分くらいになるのではないのでしょうか。本省にもどられていも関係の仕事をされるときも、ともに汗を流したなつかしい1人1人の顔が、まのあたりにあられたたかもしれません。そしてそれが、山崎さんをして単に事務的でなく、ほんとうに血の通った温かい行政をされる源の一部となっていたのかもしれません。

謹んで山崎和夫様の御冥福をお祈り申し上げます。

~~~~~〔小説の中のジャガイモ〕~~~~~

『牛肉と馬鈴薯』 国木田独歩

牛肉を現実、馬鈴薯を理想として対比させている。

村上青年にとって学生時代から憧れていた北海道での夏のジャガイモづくりは、理想とした自由の新天地に近いものがあつたが、冬の厳しさは「北国の冬」という詩的なひびきとは遠く、寒くて寂しいものであつた。

理想や信仰を食べても満腹にはならない、肉欲否定のピューリタンから現実主義に、浪漫主義から自然主義へと変化していく著者の流れをしめす。

美辞麗句では腹がふくれないが、暖かい暖炉で食べる肉はエネルギーの源であるばかりでなく、人々をつなぐきずなにもなる、と言いたかったようだ。 〈浅間和夫〉

